

【生に縁りて老死あり】

生まれてきたことを心の底から喜べるような生き方とはいかなることでしょうか。意味のある人生とはいかに生きることになるのでしょうか。生まれてきたことを苦しみとしか受けとめられないような生き方から転じて、生まれてきたことを本当に喜ぶことができるような生き方があると、釈尊は思索しました。では、それはどのようなに生きることなのか。皆さんと、このようなことを一緒に考えてみたいと思っています。『縁起経（えんぎきょう）』という短い初期經典が残されています。經典のタイトルにある縁起（梵語：pratyā-samupāda）パーリ語：paicca-samuppāda）とは、縁（よ）って起（お）こること、つまり原因によって生ずることを意味する語です。人間の苦しみがいかなる原因によって生ずるのかという釈尊の觀察を指して用いられてきた言葉です。例えば、無明（むみょう）・行（ぎょう）・識（しき）・名色（みょうしき）・六処（ろくしょ）・触（そく）・受（じゅ）・愛（あい）・取（しゅ）・有（う）・生（しょう）・老死（ろうし）という十二の項目を立てて苦しみの原因を順番に觀察することが、よく知られています。こうした觀察を十二支縁起と呼びます。

釈尊は苦しみの原因についての觀察の一段階として「生（しょう）に縁りて老死あり」と確かめています。生（jāti）とは誕生のことです。老死（jarā-maraṇa）とは文字通り老いることと死ぬことです。四門出遊（しもんしゅつゆう）のエピソードで知られる老病死を見たという苦しみの経験の意味します。この經典には「生に縁りて老死あり」に続いて「愁・歎・苦・憂・悩」が起ると説かれていきます。苦しみの経験といっても、それは例えば愁いや悲しみや寂しさや空しさや不安などとして立ち現れ、喜んで生きることをできなくなる点で何者かになります。私たちは職業や地位や人間の関係性などの様々な点で何者かになります。私たちはまた何者かであることを、喜んだり悲しんだりしながら生きています。そして、生きる意味や喜びを見いだせなくなり、生きる意味などといったどこにあるのかと疑わざるを得なくなってしまうことさえあります。釈尊は、これが人間としてのひとつの姿だと觀察しました。しかし、老死の原因が誕生にあるとは、ある意味ではあたりまえではないかと我々は思っています。こうした觀察にどれほどの意味があるのか、と。一見そう思われるけれども、生まれた時から他ならないことの觀察には、人間であるかぎり苦しみからは逃れられないというところが含意されています。縁起の觀察が開始されたという事実には、苦しみを乗り越えて、縁起の觀察が開始されたという見なければなりません。努力によって生涯をより良いものにできるかできないかというところがあるとしても、人間として生じるのは、何らかの境涯にあるということです。究極的には努力だけでは超えられないこともまたあるはずですが、だからこそ、苦しみの原因を尋ねるといふこの觀察は、老病死を前にしても奪い去られないように人生の意味を見いだすことができるかどうかを問題にしています。意味を持つものだと言って良いでしょう。

聞法会  
聞法会

7月24日  
9月22日

(木)  
(月)

午後1時～午後3時迄  
午後1時～午後3時迄

お参りをお待ちしております

涅槃堂永代経納骨・墓地受付中

